

良いお言葉での喧嘩

妻 静かにして下さいな。

夫 そっちこそ。

妻 あたくし、何時だか知ってるんですよ。

夫 僕もだ。

妻 よその男の方は夜は酒場にいらして、お帰りは朝だというのに、あなたはそういうことにはまるで縁がない。あなたときたら、家のかまどのそばが一番幸せなんですわよね。

夫 君だつて家で僕のそばにずっといたがるだろう。

妻 そうよ、あなたがそれをわかつていて下さるのならば……

夫 君は僕の人生の一時間一時間をすばらしいものにしてくれた。

妻 あなたもよ。あたくしが悲しいときには、あなたはあたくしの目から願いをすべて読み取ってくれたわ。

夫 僕たちがあの夏の晩、二人きりでベンチに腰を下ろしていた時のことを覚えているかい？ 君はいつまでも帰りがらなかった。僕もずっとそうしていたかった。そのうちに警官がやって来て、何をしてるんだって聞いたね。

妻 ええ。そして、あなたはこう言ったのよ、「邪魔しないで下さい」

夫 覚えていても。ありがたいことに、警官はわかつてくれて、行ってしまったね。

妻 だから、あたくし何度でも言いますわ、もしあなた以外の人と知り合っていたなら、面倒と腹立ちしか得ていなかったでしょうって。

夫 ああ、君を見てるとね 君は ああ、何と言ったらいいのか 本当にかわいい人だ。何時間だつてじっと見つめていたい。

妻 あなたは人にいやな事実を面と向かつて言うしかできない、お人なのよ。そして、お義母様も、この息子殿とそっくりときていらっしやる。お義母様は私に向かつて本当にひどいことをおっしゃっておいで、何か私にほめるようなところがあると、陰でほめて下さるの。でも、あたくし、お義母様には十分よくしてあげているのよ。洗濯物は全部任せてあげているし、縫物だつて一文も取らずに、やらせてあげています。完璧な嫁ですわ。クリスマスには毎年、お義

母様からすばらしい贈物をあたくしただいておりますが、お礼も申しませぬの。こんなことはすっかり忘れて下さるようですわ。

夫 君のお袋さんもまったく欠点のない人だよ。僕は何度、ちょっとした浮気をして、お義母さんに見つけられたことだろう。でも君に告げ口したりしない、内緒にしておいてくれるんだ。

妻 何て思慮深い打ち明け話でしょう。あたくしがこれまでも増してあなたを好きになるようにと、お話し下さったのね。そんなことであたくしを怒らせたりはできませんわよ。そして、あたくし、あなたにうんざりしませんから、全財産をまとめて、ぴったりあなたのおそばにとどまりますわ。

夫 嘆くことでもないだろう。そんなに恥知らずな行いでもあるまい。(拳骨でテーブルをたたく) あんまり厚かましくしないでくれ。きょう、君には少なくとももう百回はキスをしたよ。一日にそれ以上は必要あるまい。

妻 ぬけぬけと嘘をおつきになるのね。あなたってひどい方だわ。あたくしの名前の日にもそうだった。あたくしはふつつのウールのコートが欲しかっただけなのに、高価な毛皮のコートを買ってくれたりして。

夫 まだ文句を言うんだな、君は。ちゃんと覚えておくよ。誕生日には、君の図々しい慎ましさに対して五百マルクやるから、欲しいものを自分で買いなさい。そうすれば僕は少なくとも君からの感謝を期待する必要はなくなる。

妻 また非難するのね。もう慣れてしまいましたわ。きょうから先、あなたの遠慮深さはいつさいお断わり申し上げます。さもないと、あたくしあなたのために天国を凍らしてしまいますわ。つまり、地獄を燃え立たせるといふことですけど。でもあなたには何をやっても無駄ですわね。

夫 エレオノーレ、落ち着きなさい。仲直りしようじゃないか。いつまでもこんな風にチクチクときれいごとを並べててどうなる？それよりも、冷静に、面と向かって悪口を言おうじゃないか。

妻 この馬鹿！ お前さんの言うとおりだ。あたしも大賛成だよ。

夫 そうとも、頓馬の間抜け。やっぱり、こつやらなくちゃね。